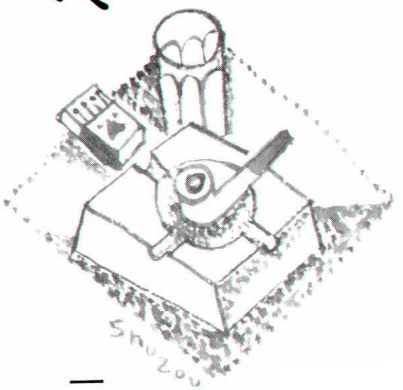
娘たちの夜なべ



三浦哲郎

新潮社

娘たちの夜なべ

著　者　三浦哲郎（みうらてつお）

昭和五十六年六月十五日　発行

昭和五十六年八月二十五日　三刷

発行者　佐藤亮一

印刷所　東洋印刷株式会社　製本所　植木製本株式会社

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電　話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定　価　一〇〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tetsuo Miura　Printed in Japan. 1981

娘たちの夜なべ＊目次

I

おふくろの筆法　11
むかしの菓子　15
娘たちの夜なべ　19
キューピーと落葉　23
老母の口髭　30
*
北国の春　36
冬の子供　38
糠塚の細道　41
夜汽車の汽笛　44
夏休み　46

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

II

赤いメダカ　53
おふくろの流儀　56
おにぎり　59
朝露とリンドウ　61
子供部屋　64
深川土産　68
*
モッキリのこと　74
サクランドリの卵　78
今年の春　82
磁石の将棋盤　86

羊の呟き　89
待ちぼうけ　92
ユタさんの甕　97
清酒好き　103
煙草と私　107
声について　109

Ⅲ

ハバロフスク一夜　115
蝶鮫のスープ　119
「我慢する川」のことなど　124
ロシアの農夫　130

魚の皮の外套　132
＊
異国の月　135
マラッカのダボシャツ　138
アフリカン・チキン　140
IV
山麓記　145
＊
「海の道」のこと　164
菜穂里という港町　167
拳銃処分　170

「素顔」を書き終えて
神威岬の落日　177
＊
蔵書のゆくえ　179
横顔　183
あとがき　203
初出一覧　204

娘たちの夜なべ

装画／島田章三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

おふくろの筆法

おふくろは、紙になにか文字を書くときはきまって鉛筆で書いていた。鉛筆以外の筆記用具――毛筆だとか、万年筆だとか、ペンだとかが、家になかったわけではない。けれども、おふくろはいつも鉛筆を使っていた。それも、手のひらのなかにすっぽり隠れてしまうほどにちびた鉛筆ばかりで、芯もまるくなったのを使っていた。

それでは書きにくいだろうから、すこし削ってやろうかというと、いらないという。芯が尖っていると、いまにも折れそうな気がして、思うように書けない。それに、書くといってもべつに大したことを書くわけでもないのだから、放っといてくれとおふくろはいった。

実際、おふくろは鉛筆を使うといっても、大したことを書くわけではなかった。つまり文章なんぞを書くわけではなかった。手紙だって文章だから、おふくろは手紙を書くわけでもなかった。私は、おふくろが誰かに手紙や葉書を書いているのをいちども見たことがなかった。それではなにを書くのかというと、忘れないためのちょっとしたメモのたぐいである。

ひさしぶりに手紙をくれた人の住所とか、買物の品目とか、漬物を漬け込む日程とか、そんなものを古封筒の裏や、新聞紙のきれはしや、剝いだ日暦の余白などに書き留めていた。

おふくろは、明治の小学校を出ただけで、文字など書くのは苦手であった。たとえちょっとしたメモのようなものでも、それを書くときは難渋した。見ていると、まず鉛筆の芯をちょっと舐める。それから、力を入れてごしごしと書く。すぐ、つかえる。鉛筆の尻で頭を掻く。またごしごしと書く。つかえる。今度は左右の腕をぽりぽりと掻く。

「なるほど、かいてるなあ。」といって冷やかすと、「黙ってなせ。」と、おふくろは怒る。覗いて見ようとすると、「駄目。」といって、子供のように両手で隠す。だから、私は、二十を過ぎるころまで、おふくろが書いた文字を見たことがなかった。自分のおふくろがどんな文字を書くのか知らなかった。

私は、郷里の高校を出ると、東京の大学に進学した。けれども、学資を貰っていた兄に不都合なことがあり、一年だけで中退して郷里へ帰って、中学校の助教員を二年勤めた。それから、また一年間、受験勉強をして、おなじ大学へ入り直した。ちょうど最初の級友たちが卒業したあとへ、私はまた一年生として入学したわけである。

私は、安い学生寮に入っていた。寮生はおおむね貧乏で、みな郷里からの送金を待ち兼ねていた。郵便配達が門を入ってくると、どの部屋の窓も一斉に開いて、「俺、〇〇、きてない?」「××ある?」そういう声が飛び交った。私には、毎月二度に分けて、ぎりぎりの生

活費が届いた。それにはいつも父の手紙が入っていた。父は若いころから商家の帳簿を付け馴れていて、達筆であった。文面も律義そのもので、かならずどこかに浪費を戒める文句が入っていた。

ところが、あるとき、いつものようにして届けられた書留の封筒を開けてみると、いつもよりすこしすくない金額の為替と一緒に、ついぞ見馴れない鉛筆書きの手紙が出てきた。

『前略。お元気でしか。父さんがとちぜん病気で倒れますたすけに、わたすが代って手紙を書きまし。……』

手紙はそう書き出されていた。いうまでもなく、おふくろが自分で書いた手紙である。私は、おふくろは手紙など書けないと思っていたから、はらはらしながら読んでみた。父が脳軟化症で倒れたときの様子が、こまごまと書かれていた。手紙の常識に囚われずに、自分の見たままを残らず知らせようとする文章が期せずして迫力に富んだ描写になっていた。何事もまるで目に見えるように書かれていた。私は読み終って驚いた。

おふくろの手紙は、田舎言葉がまる出しになっているところを除けば、まず、よい手紙だといってよかった。よく見ると、鉛筆の文字には一つ一つに濃淡があり、芯を舐めながら一字一字力をこめて書いたことがわかった。これだけの手紙を書くのに、おふくろは何日夜ふかしをしただろうかと私は思った。鉛筆の芯で頭を掻いているおふくろが、目に浮かんだ。両腕を掻くぽりぽりという音が耳の奥によみがえった。

あのときの、あのおふくろの手紙が忘れられない。

父はもうとっくに亡くなって、おふくろは今年八十四になるが、いまでも時々郷里から鉛筆書きの手紙をよこす。相変らず芯を舐めながらごしごしと書いた手紙で、いまだに田舎言葉まる出しである。甚だ郷愁をそそる手紙だというほかはない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com